

もう一人の「ハンセン病患者の母」、 グレイス・ノット

Another 'Mother of Hansen's Disease Patients,' Grace Nott



リデル、ライト両女史記念館に展示された写真「ティータム、リデルと5人」。一番右がグレイス・ノット



前列右から2番目がグレイス・ノット

リデル、ライト両女史記念館の一隅を飾る1枚の写真。ハンナ・リデルの隣にリデルより小柄な女性が座っている。それが、グレイス・ノットだ。リデルとともに熊本へやってきた英国人宣教師であり、ハンセン病患者救済に奔走したリデルの同志である。1891(明治24)年から1901(明治34)年まで熊本に住み、草創期の回春病院(1895年開設)を支えた一人である。

ノットは帰国後も回春病院を忘れて去ってはいなかった。1937年(昭和12年)に作成した遺言書に、「回春病院に100ポンド送ること」書いている。

ノットが熊本に住んでいたころ、もう1人の有名な第五高等学校の教師として赴任していた。夏目漱石である。漱石の五高在任期間は1896年(1903年。回春病院は五高のすぐ近くだが、漱石が病院を訪ねたという記録はない。ただ、ノットに会うため

に一時来熊していた母親が、留学する前の漱石と出会っている。

漱石は五高在任中の1900年、文部省の給費留学生として渡英。出発は9月、到着は10月末だった。『漱石日記』に次のような記述がある(引用は、平岡敏夫編『漱石日記』ワイド版岩波文庫2007年12月第1刷より)。

十月四日(木) 午前:(中略)、突然女の声にて夏目さんと呼ぶ者あり。驚て見ればMrs.Nottなり。(後略)
十月五日(金) 午後三時半Mrs.Nottを一等船室に訪(とう)。(後略)

このMrs.Nottは、帰路に就いたノットの母親で、その際に漱石に聖書を贈ったという。記念館には、『漱石日記』の一節も展示されている。
リデル、ノット、漱石という三つの糸が絡み合い、近代日本の歩みに一つの足跡を残している。

徳富記念園 (徳富旧邸)

Tokutomi Memorial Garden (Former Residence of Tokutomi)



徳富記念園

明治の言論人と人気作家 徳富兄弟の息遣いが残る

熊本市中央区大江にある「徳富記念園」は、徳富旧邸と徳富記念館をあわせた呼び名だ。

徳富旧邸は、明治から昭和にかけて言論界の重鎮として活躍した徳富蘇峰と、弟で小説家となった蘆花兄弟ゆかりの屋敷だ。1870（明治3）年、熊本藩庁勤務となった父・一敬が水俣から移り住んだ家で、木造2階建て延べ約200平方メートル。幼かった兄弟はここで幼少期から少年期を過ごした。

1876（明治9）年、旧士族が熊本県令や熊本鎮台を襲撃した「神風連の変」のとき、蘆花はこの屋敷の中2階から炎上する町並みを目撃し、後にその時の様子を『恐ろしき一夜』に書き残している。また、1913（大正2）年に旧邸を訪れたときの様子を『死の蔭に』に記した。

蘇峰は熊本洋学校で学んだ後、京都の同志社英学校（同志社大学の前身）に進む。1882（明治15）年、熊本に戻った蘇峰は旧邸の一部を使って私塾「大江義塾」を開き、青

年たちに歴史、政治、経済などの講義をした。卒業生は255人に上る。

1886（明治19）年には一家で東京に移り住み、蘇峰は言論人、思想家、歴史家、評論家として、蘆花はベストセラーとなった小説『不如帰』などの作家として一世を風靡した。

旧邸は1962（昭和37）年、熊本市に寄贈され、熊本市の有形文化財に、大江義塾跡は熊本県の史跡に指定された。

1970（昭和45）年、明治百年記念事業で敷地内に3階建ての徳富記念館が建てられた。大江義塾時代の蘇峰の写真や、徳富記念園の開館を記念して堅山南風から寄贈された蘇峰の肖像画のほか、蘇峰と蘆花の著書や自筆原稿などを展示している。

庭のカタルパの木は、蘇峰の師で同志社英学校創立者の新島襄からアメリカ土産として贈られた種子の2世・3世で、毎年5月中旬頃に上品な真白い花を咲かせる。熊本地震では旧邸の外壁や内壁がはがれ、柱が傾くなどの被害を受けて休館。復旧工事を終えて一般公開を再開したのは、2022年12月だった。



明治100年事業として建てられた徳富記念館。



大江義塾草創期の教室。



旧邸には大江義塾で塾生や蘆花が使用していた机も置かれている。



明治19年11月、大江義塾解散式に際して。



大江義塾で蘇峰が使用していた書見台。



徳富蘆花



徳富蘇峰



被災後のすがた

徳富記念園のある熊本市中央区は、熊本地震で震度6強を観測した。記念園の真下にも、熊本地震で動いた布田川断層帯と日奈久断層帯の一部がある。徳富旧邸は柱が傾き、土壁が崩れるなどの被害を受けた。



軒先がフェンスを越えて隣の敷地にかかってしまった。地震から復旧工事が始まるまで、傾きを押さえるサポートを施して倒壊を防いだ。室内にも補強用の筋交いを入れた。

蘇峰が揮ごうした屏風「富士山を詠む」が被害を受けた。その後修復された。



障子が外れ、ねずみ漆喰と呼ばれる土壁が複数個所で崩れた。柱と土壁の間に隙間ができたところもあった。



伝統技術に精通した熟練の大工や、左官技術を持つ職人たちが丁寧に復旧作業にあたった。部材は倉庫をつくり、保管した。



柱や梁などが損傷したり、腐ったりしている部分は、「繕い」を施して最大限再利用した。削った柱に合う形に削り出した新しい柱と組み合わせる「金輪継ぎ」など、釘を使わない伝統的な手法を使った。



「いろはにほへと」と数字を組み合わせ、「いの1」「いの2」「ろの1」などと番号札をつけ、どこにあった部材かを詳細に記録した。板の1枚1枚に至るまで、正確に元の位置に戻した。



瓦も番号をつけて解体し、元の位置に載せた。瓦と瓦の間には漆喰を施し、職人たちが一つひとつつなぎ合わせた。



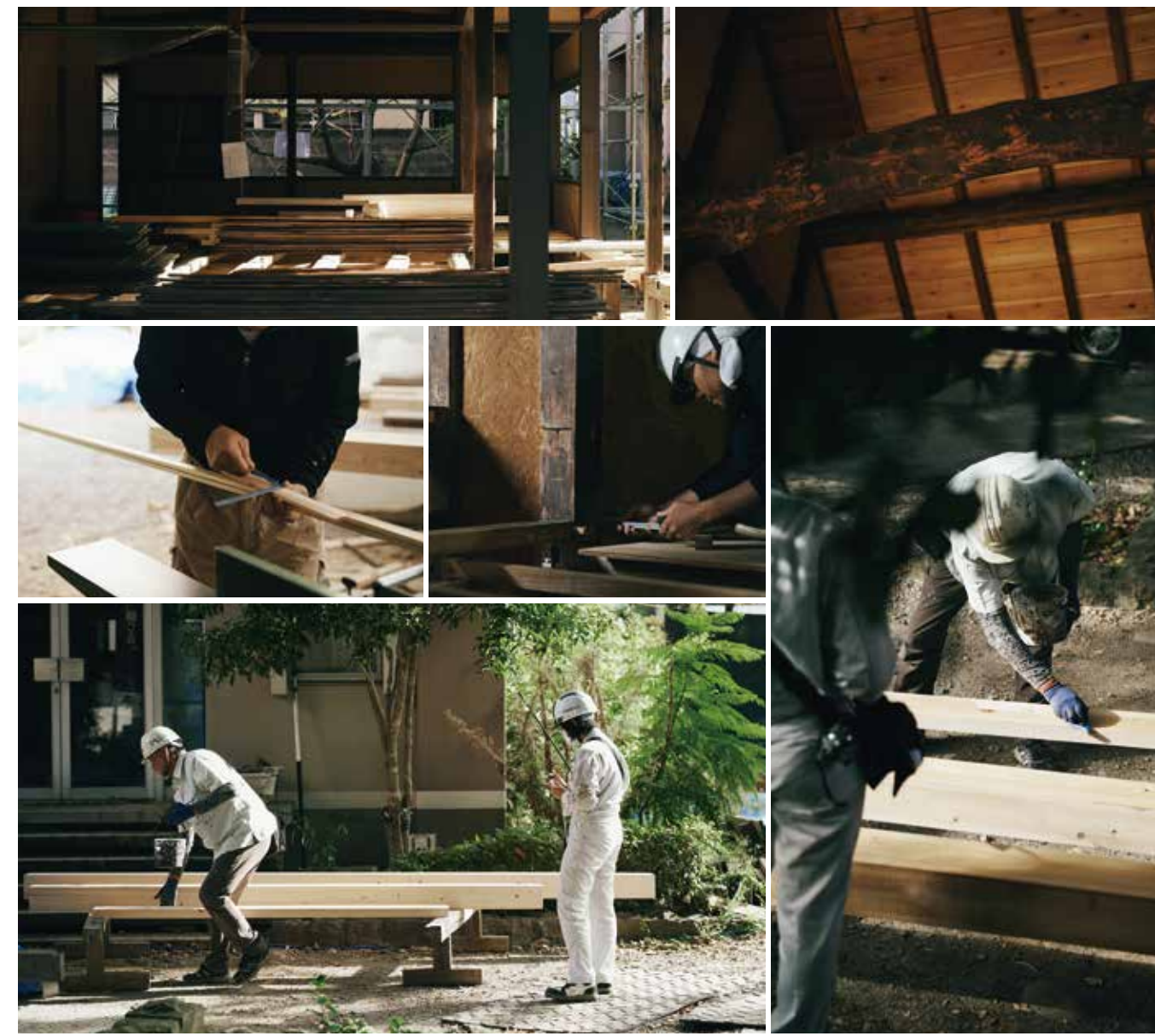


文化財の復旧を得意とする職人たちが、手作業で削っていく。スギやヒノキ、カンなど、どの木材のどの部分を使うのか。どのカンナで削るのか。一つひとつ吟味していく。



繕いを施した部分はできるかぎり目立たないように気を配った。別の家で使われていた柱が再利用されていた跡もあった。明治の人たちは木材を大切に使っていたことが分かる。





完成すれば見えなくなる部分も、細部にわたって忠実に復元した。隠れる部分には修理年号の焼き印を押した。修理内容も後世に伝えるべき大切な情報だ。

復旧現場から

「徳富旧邸」の下には断層が走っており、熊本地震では地面に大きな地割れができた。建物が傾き、軒先が隣の敷地にはみ出してしまった。

当初、旧邸を曳家^{ひきか}して地割れを直し、1メートル西側に移すことを計画。しかし、移動は困難とわかり、解体して復元する方針に変更された。現場の管理にあたった株式会社カワゴエ（熊本市東区）の取締役、丸山憲一さんに聞いた。

増築のため建物の

曳家ができず

伝統の修繕方法で

一つひとつ吟味

徳富旧邸は複数回、修繕や増築されている。熊本地震では瓦がずれたり、壁が落下したりといった被害があったが、「倒壊を免れたのは、過去の修繕で壁がセメントで作られていたからかもしれない」と丸山さんは見る。

当初は建物を丸ごと引く曳家をする計画だったが、建物を固定して持ち上げることは難しいことが分かった。理由は増改築が繰り返されていた上、石の上に載っているだけの簡素な土台の造りだったためだ。一度解体して復旧する方針に変更された。

柱や板の一つひとつに番号をつけ、どこに

畳の下から

囲炉裏が見つかる

解体していたところ、南の部屋の畳の下から囲炉裏が見つかった。囲炉裏の側壁には、木の板が張ってあった。あて名が書いてあり、昔の郵便小包の木箱の一部とみられるという。「解体は驚きと発見の連続です」と丸山さんは話す。復旧工事は、元あった場所に元のように戻すことが基本のため、囲炉裏も床下に置いて復旧した。

壁は灰色をした「ねずみ漆喰^{ししぐい}」。松の木を燃やした時に出る炭でつくった「松煙^{しょうえん}」を、元の壁と同じ色になるように漆喰に混ぜて塗り替えた。



畳の下から見つかった囲炉裏は、元あった場所に置いて復旧した。



古い柱(右側)を削り、合う形にした新しい柱(左側)と組み合わせた。



明治天皇が熊本に行幸されたときに泊まれた「行在所」の一部だった部屋。東京青山の徳富邸で、蘇峰と蘆花の父・一敬と久子夫人が愛用した食卓が置かれている。

一級建築士

丸山 憲一 さん



何があったかを詳細に記録。取り外した部材は6千点を超えた。破損した部分は伝統的な方法で修繕。元の部材と同じ形にした新しい部材を組み合わせ、くいを打ちこんで締める「金輪継ぎ^{かなわ}」や、十字にくりぬき、継ぐ木も十字にして組み合わせる「十字継ぎ」などの手法を使った。

「横から力が加わるところは金輪継ぎ、上から力がかかるところは十字継ぎなど、一つひとつ吟味して手法を決定しました」と丸山さん。杭には、木材の芯に近くて赤色をした「赤身勝ち」と呼ばれる丈夫な部分を使ったという。

明治天皇の

旧行在所だけは解体せず

西側の一部屋だけは解体しなかった。明治天皇が熊本に行幸されたときに泊まれた「行在所^{ぎんざいしよ}」の一部分で、行幸後に新町から移築されていた。由緒あるため、この部分だけは解体せず持ち上げて移動させ、復旧された本体の建物と再びつなげた。

地割れ修復のため1.5メートルほど掘って地盤を入れ替え、基礎を打った。耐震補強のため床下にゴム製ダンパーを取り付けた。屋根には「目板瓦^{めいたがわら}」という熊本独特の瓦が載っており、屋根漆喰で継ぎ目を固めた。

明治の雰囲気を残したまま、見えない部分で耐震性を強化した。「復旧するとともに、今の技術を取り入れて、前より強い建物にしました。徳富旧邸という文化財を次世代に残せて安堵しています」と丸山さんは話した。



復旧した徳富記念園

明治の雰囲気そのままに復旧した徳富旧邸。開放的な家の造りも当時のままで、可能な限り元の障子や柱を使った。部屋にたたずむと、蘇峰や蘆花が暮らした当時の息遣いまで感じられるようだ。

門を入って直ぐの六畳一室の中二階は、父の書斎であった。此書斎と
 此に伴ふ二階建の一棟が新築された時、五歳の余は大工が挽き屑の
 四角な木切れをもらって遊んだことを覚えて居る。

一徳富蘆花『死の蔭に』より抜粋



ゆかりの人

「蘇峰は優しいおじさんだった」
頭をなでてもらった思い出

徳富田郎は1962(昭和37)年、蘇峰・蘆花の姉の子孫から熊本市に寄贈された。子孫の一人で、「徳富蘇峰の会・熊本」の会長を務める近澤真人さんに蘇峰・蘆花や旧居の思い出を聞いた。



記念館に展示されている蘇峰の肖像画と愛用のステッキ

「猪一郎おっさん」と
呼んでいました

— 蘇峰・蘆花とはどのような関係ですか。

近澤 蘇峰・蘆花兄弟の姉のひ孫にあたります。養子も含めて兄弟姉妹は8人いて、6番目が蘇峰、8番目が蘆花です。2番目の常子の娘が磨磋^{まさ}、3番目の光子の息子が侃^{すなわ}で、2人はいとこ同士で結婚しました。私の祖父母です。私が子どものころ、旧居には侃・磨磋夫婦が住んでいました。

蘇峰の本名は猪一郎^{いのちろう}で、私は『猪一郎おっさん』と呼んでいました。侃と磨磋には7人の子どもがおり、長男が熊本を離れたため、次男である私の父・龍雄がこの家を守ることになりました。

蘇峰の髪を納めた「髪塚」で
除幕をしました

— 猪一郎おっさんとは
どんな思い出がありますか。

近澤 1950(昭和25)年、公職追放中だった蘇峰を励まそうと、吟詠家の瓜生田君子^{うりきゅうだ}さんや大橋万亀さん、祖母の磨磋らが蘇峰の髪を納める「髪塚」を企画したところ、蘇峰は喜んで頭髪を送ってくれました。当時、数え年で4歳だった私は髪塚の除幕式で幕を引きました。「髪塚」は熊本市西区島崎にあります。

翌年、蘇峰が帰郷したとき、田郎で会いしました。除幕について「ありがとう」と言って、頭をなでてくれたんです。私から見れば普通のおじさん(笑)。有名人だとは思っていませんでした。ニコニコして優しい印象でした。

蘆花(本名・健次郎)は私が生まれる20年前の1927(昭和2)年に死去しています。私が進学した東京の大学のキャンパスの近くには蘆花恒春園がありました。蘆花が住んでいたところです。不思議な縁を感じました。

— 旧居は、どんな様子でしたか。

近澤 1870(明治3)年に蘇峰一家が水俣から移住してきた当時、この地は3000坪もある広い敷地だったそうです。3つの井戸がありました。また母屋には30枚以上の雨戸があり、小学生だった私は雨戸を閉めようとして、何度も庭に落としていました。旧居を熊本市に寄贈することを決めたのは祖母の磨磋と聞いています。貴重な建物なので、役立ててもらおうと思ったようです。

— 蘇峰を顕彰する活動をされているそうですね。

近澤 会の発起人代表の中村青史さん(元熊本大学教授、2023年没)から「会長を引き受けてほしい」と頼られました。2021(令和3)年のことです。親戚の中でも蘇峰に会ったことがあるのは私だけでしょう。会では勉強会や講演会を開くほか、会報「蘇峰」を年1回発行しています。

新島襄ゆかりのカタルパの木は5月ごろ、白い可憐な花を咲かせます。多くの人に見に来てもらい、記念館で徳富兄弟のことを知り、時代の移り変わりを考える機会になればうれしいです。



「国民の友」創刊当時の社員(明治20年)。後列中央が蘇峰



「近世日本国民史」執筆中の蘇峰(昭和8年)



昭和26年5月、熊本に帰郷した蘇峰は髪塚を訪ねている。右側は瓜生田君子女史

[写真提供: 香雲堂吟詠会 第三代 瓜生田山樓女史 (徳富蘇峰の会・熊本 副会長)]